『中国語文研究会　国際学術大会』（於韓国高麗大学）に参加して

溝部良恵

二〇〇二年一二月一三日、一四日の両日韓国高麗大学において、中国語文研究会主催により「中国文学与東亜文化」をテーマとする学会が開催された。以下参加者の一人として学会の模様及び韓国における中国文学研究の状況について報告したい。

一．はじめに――学会参加の経緯について――

中国語文研究会は、当初一九八六年に「高大（高麗大：筆者注）中国語文研究会」として創立された。[1] 一九九三年には学会名を「中国語文研究会」と変更し、全国規模の学会となった。一九八八年からは学会誌『中国語文論叢』（一年二回）を発行しており、二〇〇二年現在、通算二三輯を発行している。また同誌は二〇〇二年韓国国際学術財団によって、国家A級ランクの学術雑誌として認定されている。こうした活動のほか、一九九八年以降三度にわたり、国際学術討論会を開催しており、今回は第四回目の国際会議となった。学会の運営は、現在でも主に高麗大学を中心に行われており、現同学会会長は高麗大学の崔溶澈教授が務めている。また今回の学会は高麗大学の中国語中国文学科創設三十周年を記念したもので、高麗大学中文科との共催という形をとっていた。

東京大学中国語中国文学科では、二〇〇二年七月崔溶澈教授をはじめとする高麗大学中国語中国文学科の訪問を受け、研究室見学及び座談会が行なわれた。帰国後崔溶澈教授より戸倉英美教授のもとへ学会参加の招待状が送られてきた。戸倉教授は学会参加を希望するとともに、それぞれの研究において朝鮮刊本の調査を行っていた大山潔（東京大学大学院博士課程学生、当時）と溝部の学会参加を打診してくださった。崔溶澈教授より、大山、溝部のもとにも、参加招請の書類が送付され、戸倉教授とともに発表の機会が与えられた。また論文の発表は行わなかったが佐野誠子（京都大学人文研究所助手。同時に二〇〇三年三月まで東京大学大学院博士課程に在籍）も同行し、最後の全体討論に参加した。

筆者は二〇〇一年一二月、朝鮮刊本『太平広記詳節』の調査のため初めて訪韓し、その際当時高麗大学外国人教師であった劉寧北京師範大学助教授により、崔溶澈教授に紹介していただいた。[2] 当時筆者は東京大学中国語中国文学科において、助手を務めていたが、二〇〇二年四月より現職（慶應義塾大学経済学部専任講師）に移動した。高麗大学訪問団来日の際はすでに東京大学を離れていたが、筆者も座談会に参加させていただいた。このような経緯と東大関係からの学会出席者の中では、二度目の訪韓ということもあり、参加者を代表して報告記を執筆することを提案し、他の参加者の了承を得た。報告記全体は、最初溝部が執筆した後に、参加者の意見を求めたが、最終的な文責は溝部にある。

二、会の日程及び概要

二―一　プログラム

全体の日程は以下のようなものであった。

十二月十三日

九時三十分―十時十分　　開会式

十時十分―十一時　主題講演
十三時―十五時　第一部論文発表
十五時三十分―十七時三十分　第二部論文発表

十二月十四日

九時三十分―十一時三十分　第三部論文発表
十三時―十五時　第四部論文発表
十五時三十分―十七時　総合報告、総合討論
十七時―十七時三十分　閉会式

論文発表は、それぞれA組、B組に分かれ、三篇ずつ行われたので、計二十四本の発表が行われたことになる。主題講演、論文発表の詳細は以下の通りである。

〈主題講演〉

全寅初（延世大学）　中国文学与東亜伝統文化
劉象愚（北京師大）　中国文学的全球化―中西文学比較（都合により欠席）

〈第一部　論文発表A組〉

兪炳禮（誠信女大）　白居易〈長恨歌〉的主題与其在韓国古典詩歌中的受容状態
沈慶昊（高麗大）　朝鮮漢文学与袁宏道
羅立剛（上海大）　山水清音―古代東方的山水意識

〈第一部　論文発表B組〉

戸倉英美（東京大）　蘭陵王与納曾利—古代東亜細亜的楽舞

胡文彬（中国芸術研究院）《紅楼夢》与中韓両国的文化交流—対《紅楼夢》在韓国流伝的幾点思考

李琮敏（Hanbat 大）　中国〝東方学〟視角的興起与其政治意義

〈第二部　論文発表A組〉

大山潔（東京大）　十四～十七世紀《詩法源流》在中日韓的流伝与吸収

劉衛林（香港城市大学）　中韓詩話比較研究—以《櫟翁稗説》所論《金陵五題》為例

李青春（北京師範大学）　簡論〝詩亡〟与〝《春秋》作〟之関係

〈第二部　論文発表B組〉

溝部良恵（慶應大）　魯迅以前的中国小説研究在日本

張新穎（復旦大）　中国文学現代困境中的言語経験

夏菁（新加坡国立大）　留日春柳派与近代上海脆弱情縁

〈第三部　論文発表A組〉

王水照（復旦大）　蘇軾作品初伝韓、日両国之比較研究

洪承直（順天鄕大）　関於柳宗元〈乞巧文〉之〝巧〟

李安徳（徳国 Bochum 大）　蘇軾〈赤壁賦〉対朝鮮代文学之影響初探

〈第三部　論文発表B組〉

李旭淵（西江大）　流散（diaspora）与文学―以高行健為例
趙憲章（南京大）　〈霊山〉文体研究
朴宰雨（韓国外大）　再論中国現代韓人形象小説的発展脈絡与特点及界限

〈第四部　論文発表A組〉

李進益（花蓮師大）　想像中華―石川鴻齋的文学世界（都合により欠席）
王潤華（元智大）　辺縁思考与辺縁文学―重構東南亜本土幻想／語言／史地／文化的策略
趙冬梅（大真大）　金評《西廂》与《広寒楼記》

〈第四部　論文発表B組〉

洪濤（香港城市大学）《紅楼夢》翻訳遇到的版本問題和校訂問題―《紅楼夢英訳評議》系列論文之一
辜美高（広東外大）　《儒林外史》〝真儒〟与〝悪儒〟的比較―以王冕与厳貢生為例
小川利康（早稲田大）　論周作人〈老虎橋雑詩〉及其雑詩的体式

（論文題目は、パンフレットと当日配布された冊子で異なる場合には、冊子の題目を優先した。）

筆者は当初各組の論文題目を見渡した時には、論文の内容が古代から当代まで多岐に渡っているため、全体としてまとまりを欠くような印象を受けた。しかし各発表においては、発表者は事前に論文提出を求められていたため、コメンテーターの多くはそれに基づき、当日レジュメを用意しており、発表後の質疑応答はとても密度の濃いものとなったと思う。このため学会が終わった時には、様々な角度から「中国文学と東アジア文化」というテーマが深められ、参加者が各自の今後の研究にとって大切な視点を得ることができたのではないかと感じることができた。このよ

うな会の成功の背景には、崔溶澈教授をはじめとする中国語文研究会および高麗大学中国文学科の方々の多大な尽力があったわけであるが、同時にそこには現在の中国文学研究において、韓国が新たに強力な存在となりつつあることが象徴されていたように思う。以下いくつかの論文の内容を紹介しながら、このことについても具体的に考えみたい。

二―二　発表内容（一）

最初に基本的なこととなるが、今回の学会では、使用言語は中国語（普通話）とされた。論文の提出はもちろんのこと、中国語文研究会が用意した招待状、パンフレットなどすべての印刷物、あるいは事前のやりとりや会の進行時においても、司会、発表、コメント、討論のすべてにわたり、ほぼ中国語を用いて行われた。また飛行場へ筆者達を迎えに来てくれた院生や会場の手伝いをしていた学部生、院生達も、個人差は多少あるが、全体的に非常によく中国語を話し、またコミュニケーション能力も高く、我々国外からの参加者が不便に感じることは全くなかった。（これは高麗大訪問団を東大に迎えたときにも感じられたことであり、学生達は座談会においても非常に流暢にかつ積極的に中国語を話していた。）こうしたことは中国文学の学会であれば、当然のことのように考えられるかもしれないが、もし日本で我々がこのような学会を催すとしたら、果たして同じように行うことができるだろうか。高麗大のスタッフの語学的なレベルの高さに敬服せざるを得なかった。また発表、討論の場においても、中国語を使用言語とすることによって、中国の学者に対して、特別講演をお願いするようなお客様扱いに終わることなく、実質的な討論の場が用意されたように思われる。

論文発表では、最初に全寅初韓国延世大学教授による「中国文学与東亜伝統文化」と題する基調講演が行われた。全教授は、漢字という文字手段と儒教、仏教という思想が、東アジアの日中韓三国の文化に共通する普遍的な要素であることを指摘すると同時に、三国がそうした普遍的要素とそれぞれに固有の要素を併せ、そこからそれぞれに独自

の文化を作り上げてきた過程を論じた。さらに全教授はこうした三国に共通な普遍的要素は、中国からもたらされたものであり、日韓はそれをほぼ一方的に受容する立場であったという歴史的経緯を論じるとともに、現在では逆に現代の日本や韓国の大衆文化が積極的に中国に受け入れられていることにもふれ、この三国の東アジア文化が新たな交流を築きはじめていることを指摘した。全教授の論文発表は、基調講演にふさわしく今回のテーマ「中国文学与東亜文化」を的確に示したものであった。

各部の論文発表は、A組、B組の二組に分けて行われたため、筆者は全ての発表を聞くことはできなかったが、以下いくつかの論文を紹介したい。

中国復旦大学の王水照教授による「蘇軾作品初伝韓日両国之比較」では、蘇軾の作品が高麗や平安、鎌倉時代の日本に、いつどのような層を受容者として伝えられたのかが比較考察されていた。例えば高麗では士大夫が中心的な受容者であったのに対し、日本では禅僧が主な受容者であることや、高麗では科挙が行われたのに対し、日本では科挙が行われなかったことが両国の蘇軾受容に大きな違いを生み出したこと、さらにそうした受容者はそれをもとにどのように自らの文学を作り出したのか、あるいは蘇軾に対する研究を行ったのかということにも言及している。王教授の論文は、綿密な考証と客観的な考察の姿勢に貫かれており、日中韓それぞれの文学研究において、有用な資料と視点が示された。

大山潔氏の「詩法源流在中日韓的流伝与吸収」も同じく元代の詩論書『詩法源流』が、朝鮮と室町時代の日本に流伝し、それぞれの文化の相違を反映しながらどのように受容されていったのかを論じている。この書も朝鮮では士大夫層によって、日本では五山の僧侶によって復刻出版され受容されたという事実は、蘇軾の場合と共通する。また中国における『詩法源流』に対する評価は、明代には杜甫尊重の気運に乗って非常に高く、度々再版されていたが、明末清初の王士禎・仇兆鰲らによって偽書とされた後は、この説が有力なものとなり、現代の学者の中にも、『詩法源

流』に対して偽書説をとるものが多い。これに対し五山版に付されていた跋文によって偽書説を覆すことが出来るという大山氏の発表は注目を集めた。従来の中国文学史において、元代の詩論は見るべきものがないとされてきたが、大山氏の報告は、このような見方に修正を迫るものだろう。この論文は、最後の総括討論において、王水照教授から高く評価された。

中国芸術研究院研究員で、中国紅楼夢学会副会長の胡文彬氏による「《紅楼夢》与中韓両国的文化交流—対《紅楼夢》在韓国流伝的幾点思考」は、韓国において『紅楼夢』がどのように受容されていったのかを論じたものだった。胡氏は、『朝鮮王朝実録』などの史書の記述に、韓国からの使臣が、中国から書を購入する際に、「稗官小説」は有害な書であるから購入を差し控えるようにとの議論があったことを指摘し、さらにそれは裏返せば実際はそういった禁令を出さなければならないほど朝鮮の使臣達が多量の「稗官小説」を購入していたのではないか、と分析した。さらに現存する『紅楼夢』ハングル語訳は、朝鮮王朝憲宗の王妃の蔵書閣であった楽善斎から発見されたものであり、後宮が朝鮮王朝における中国小説の受容に大きな役割を果たしていたと考えられることなどが指摘された。

兪炳禮韓国誠信女子大教授による「白居易〈長恨歌〉的主題与其在韓国古典詩歌中的受容状態」は、日本文学にも大きな影響を与えた白居易の『長恨歌』について、その平易でロマンチックな描写は、朝鮮の文人にとっては、儒教の論理に悖るものとして批判された事実を紹介するとともに、同じく平易な言葉で不遇な妓女を描いた『琵琶行』に対して、文人達はそこに現行政治に対する批判を読み取り、支持したのとは対照的であると指摘した。総じて言えば、高麗及び朝鮮時代の文人達は、白居易の閑適詩に影響を受けつつも、一方で儒教的な論理から、詩は政治的社会的な意義を持ったものでなければならないという規範意識が強かったという。

これら胡文彬氏や兪炳禮教授によって指摘された韓国における文学受容の問題は、筆者にとって新しい知識であるとともに、中国文学に対する日韓の受容の相違を知ることができたという点で、興味深いものであった。とくに高麗、

朝鮮時代の文人達の白居易の『長恨歌』に対する評価は、平安時代の日本人の評価と相当に異なると感じられた。王水照教授や大山潔氏が指摘していたように、こうした相違は、詩や小説の受容者の性質や社会構造の違いに起因するものと思われる。つまり高麗、朝鮮では、中国から科挙制度が取り入れられており、詩の受容者である文人達にとって、詩を読み、書くということは、余興や楽しみではなく、その内容は社会的に有用であることが求められることが多かった。一方日本では、詩や小説に対して、社会的な意義や政治的な意図を読みこもうとする姿勢は、それほど強くはなかったように思われる。こうしたことから、日韓における中国文学の受容の特色を考えていく上で、科挙を取り入れたか否かということは、とても重要な要素であると感じられた。

以上の論文のほかにも、高麗大沈慶昊教授の「朝鮮漢文学与袁宏道」、香港城市大学劉衛林教授の「中韓詩話比較研究―以《櫟翁稗説》所論《金陵五題》為例」、Andreas Mueller-Lee（李安徳）氏（ドイツ Bochum 大博士課程在学中、当時韓国に留学中）による「蘇軾〈赤壁賦〉対朝鮮代文学之影響初探」などで、朝鮮時代の中国文学受容の問題が論じられた。

また戸倉英美教授の報告「蘭陵王与納曾利―古代東亜細亜的楽舞」は、異なる視点から日中韓三国の文化の交流を論じていた。日本の雅楽は、五世紀から九世紀にかけて、東アジアの各地から流入した音楽をもとに発展したものであるが、このうち唐楽の蘭陵王と高麗楽の納蘇利は、いずれも恐ろしい形相の面に特色があり、古来しばしば一対で演じられてきた。しかし二十世紀の初めより、日本の著名な学者たちは、蘭陵王インド起源説を発表し、現在もこの説が広く受け入れられている。これに対し戸倉教授は、中国と韓国の学者の研究に基づき、蘭陵王は納蘇利と同じく儺戯から発生し、中国起源であると主張した。そして日本の学者が誤った理由は、儺という風習が中国から日本に伝わった後、大きく変化したことにあるとした。中国では鬼面を着けた方相氏が、朝臣を率いて目に見えない悪鬼を追い払うのに対し、日本の宮中行事では、群臣の一部が追われる側の悪鬼に扮して登場した。方相氏も異様な風体をし

ていたため、次第に背後の朝臣から追われるものとなり、このような行事を追儺と称するようになった。節分に行われる豆まきの起源であり、日本には鬼に扮したものが邪気を払うという信仰は定着しなかった。一方韓国にはこの信仰が伝わっていたため、蘭陵王と納蘇利の意味を正しく理解することができた。このことから戸倉教授は、雅楽は日本に伝えられてきたものではあるが、その研究には、周辺諸民族の文化に対する理解が不可欠であると指摘した。

このように古典文学方面の発表では、近代以前は圧倒的な文化の供給者であった中国に対して、日本と韓国という二つの受容者を比較考察することによって、個別に見ていただけではわからないそれぞれの特質が浮かびあがったのではないかと思われる。

ところで今回の学会のテーマである「中国文学与東亜文化」は、我々にとっては、あまり目新しいものではないと思われるが、現在韓国文化界において、「東アジア論」は様々な議論を巻き起こしている問題であるという。『中国―社会と文化』第一七号の特集「二十一世紀の日本に東アジア文化研究は必要か？」に収められた李成市氏の「日本・韓国にみる『東アジア論』の歴史的文脈」（中国社会文化学会二〇〇一年度大会シンポジウムの案内。尾崎文昭「企画の趣旨」末尾に収録。）によれば、広域的な地域概念としての「東アジア」は、日本においては一般に定着しているが「韓国の歴史学界では、「東アジア世界論」は、かつて植民地期に朝鮮の歴史と文化の独自性を否定するイデオロギーと類縁的なものとみなされ、肯定的な議論の対象とはなっていない」という。さらに「「東アジア世界論」の理論的な骨格ともいうべき冊封体制論に内包される中国中心的な視覚や、その一方で日本の自立性を強調する研究傾向への拒否感は根強いものがある」という。筆者がこの文章を目にしたのは、不勉強ながら学会が終了して帰国した後であり、学会に参加している最中には、主催者側の意図や韓国側の参加者の「東アジア」という概念に対する問題意識に気づくことはなかった。日本で一般に定着している「東アジア世界論」は、韓国、中国にも共通して定着しているものと、何の疑問もなく思いこんでおり、正直に言えばこのテーマを少々凡庸なものとすら感じていた。しかしこのことをふ

まえてみると、日韓の中国文学受容の変遷を追った王水照教授や胡文彬氏の論文発表は、中国文学を中心的なものとせず、また日韓の文学の自立性を必要以上に強調したものでもない、極めて客観的なものであり、中国側の学者にとっても、このような研究を行う契機となったのは、先にも述べたように、この学会が中国の研究者も日本や韓国の研究者と同じ立場で参加できる議論の場として用意されたからではないかと思われる。つまり中国国内でこうしたテーマで学会が行われたとしたら、恐らく李成市氏が指摘するような、中国を中心とする視点は免れなかったであろう。現在韓国で盛んに論じられている「東アジア論」について、詳細はわからないが、今回のこの学会の形態は、そうした議論を経た上での、新しい模索の一つを示していたのではないかと思われた。(3)

今後こうした国際学会の機会は、益々増えていくものと考えられ、さらにそれは日中韓の三国に限らずに、欧米諸国などの参加者も含んだものとなっていくものと予想される。そのような時に、こうした参加者の属する国や地域に特有の問題意識に留意しつつ、学問的に有効な議論のできるような場を設けるということは、益々重要な問題となってくるだろう。

二―三　発表内容（二）

次に筆者自身の報告について触れたい。筆者は「魯迅以前的中国小説研究在日本」という題目で、中国における本格的な中国小説史の嚆矢と言われる魯迅の『中国小説史略』（一九二三、一九二四年）以前に日本で書かれた中国小説史に関する記述について考察を試みた。筆者は唐代小説の研究を行っており、とりわけ中唐初期に書かれた戴孚の『広異記』に注目してきた。この小説集は、一般に「志怪から伝奇への過渡的作品」と評されてきたが、筆者は実際に作品に触れてみて、『広異記』はそのような評価だけに終わる作品ではないと思うようになった。そして作品に即してそのことを考えながら、上記のような作品評価の枠組みを支えている小説史自体についても、疑問を抱くように

なった。[4] 周知の通り、中国で所謂現代的な意味での小説が作られるようになったのは、六朝志怪を経て、唐代になってからであるといわれる。さらに魯迅は『中国小説史略』において、初唐、盛唐は数篇の先駆的な伝奇が書かれたのみで見るべき作品がほとんどない空白期であり、中唐に至り、突如多くの作品が書かれるようになったと指摘した。こうした「六朝志怪から唐代伝奇への飛躍」という捉え方は、現在に至るまで定説とされている。そして研究対象も魯迅が『中国小説史略』や『唐宋伝奇集』などで取り上げた単行の伝奇を中心としていた。しかし実際には、初唐、盛唐にも数多くの志怪風の小説が書かれており、その中には六朝志怪から一歩を踏み出しているものも多くある。そのため近年程毅中、李剣国各氏をはじめとして、徐々にこれまで取り上げられることの少なかった作品集に注目して基礎的な研究を行う動きが増えており、さらには唐代に書かれた志怪風作品、伝奇、変文など小説にかかわる全ての作品を視野に入れた上での、唐代小説史の記述が試みられつつある。しかし一方でこうした研究は、初唐、盛唐に書かれた作品を発掘し、魯迅が描いた唐代小説史の空白を埋めるにとどまっており、個々の作品をきちんと評価し、それらの作品を合理的に位置づける唐代小説史叙述の新たな視座を見出すには至っていない。そこで筆者はこのような問題に取り組むためには、作品そのものの分析の他に、こうした唐代小説史の枠組みがどのように形成されるようになったのかを検討することが必要であると考えた。また近代において成立した「文学史」という制度の来歴、構造を様々な角度から考察した論文集『中国の文学史観』（川合康三編著、汲古書院、二〇〇二年）の冒頭に収められた川合氏自身による論考「今、なぜ文学史か――序にかえて――」において、今我々が自明のものとしているような「中国文学史」が近代においてどのように誕生したのか、つまり「中国文学史の歴史」を考察していることに興味を持ち、小説史の分野においても同じような考察をしてみたいと考えるようになった。とりわけ小説は、西洋近代の影響を受け、人々の注目を集めるようになったジャンルであることからも、このような考察を行うことも意義のあることではないか、と思われた。川合氏は、一八九〇年代に、中国に先んじて日本において多くの中国文学史が書かれたことを指摘して

いるが、小説史に関しても魯迅が『中国小説史略』を書くにあたり、日本の塩谷温が書いた『支那文学概論講話』（一九一一年）を参考にしたということは、早くから指摘されている。そこで塩谷温『支那文学概論講話』をも視野に入れながら、日本において、魯迅の『中国小説史略』が書かれる以前に、中国小説史に関するどのような記述が見られるのかを考察してみることにした。まず『中国の文学史観』資料編に収められた明治期に日本で刊行された中国文学史において、小説史の記述がどのように行われているかを調べた。その結果この時期の中国文学史の中では、ほとんどまず最初に『漢書』「芸文志」における「小説家」の定義をあげ、その後六朝、唐代の小説にはほとんどふれずに、元曲以後の戯曲小説に紙数をさいていることがわかった。このように内容に偏りが見られるのは、この時期の執筆者達の力量に問題があったためであると考えられ、『漢書』「芸文志」の記述に言及しているのは、『四庫全書提要』の「小説家」にこの記述が取り上げられているからであり、元代以降の戯曲小説については、金聖嘆による白話小説批評などすでにある程度、小説に関する記述が蓄積されていたためと思われる。一八九七年に初の中国小説戯曲史の専著として書かれた笹川種郎の『支那小説戯曲小史』においても、この傾向は変わらない。[5] そもそも笹川種郎は、大学では中国文学を専攻しておらず、日本史を専攻していた。このために冒頭「著者曰く」として、「吾が学の浅くして若くして識の狭き、未だ洽く支那の小説と戯曲とを窺ひ知り得たるに非ず。其名を聞て未だ見ざるの書あり。」と述べている。これは明治以降近代化を進めることに熱心であった日本において、文学史の方面においても、西洋の制度を積極的に取り入れようとしており、その内容の充実よりも「文学史」「小説史」という形式を整えた本を書くことが緊急の課題であったためと考えられる。[6] こうした中で塩谷温は、ドイツと当時の清国に留学し、「小説」を重要なジャンルとしている西洋の状況を知るとともに、清においては、葉徳輝に戯曲などを学んだ。ところで塩谷温には、ドイツ、清において学んだほかに、小説を研究していく上で大きな影響を受けた人物がいる。それは明治前期の日本の漢詩詩壇において、領袖的人物であたった森槐南（一八六三―一九一一）である。森槐南は塩谷の学生時代に、東京

帝国大学において講師を務め、小説の講義を行っていた。また『作詩法講話』（一九一一年）という漢詩の作詩法を説いた著書のなかで、一章を小説に割き、これまでの小説史では触れることのなかった先秦の神話や六朝、唐代の小説についても、詳しい解説を加えるとともに、作者の個性、創造性の重視を強調した。森槐南は同じく明治期の有名な漢詩人森春濤を父に持ち、幼い頃から、漢詩、漢文を学び、さらに父の友人の中国人に中国語を習うなどして、詞や戯曲、小説にも通じていた。このため明治期のほかの中国小説史執筆者達と異なり、森槐南は自身の豊富な読書経験に基づき、中国小説の変遷をとらえたということができると思われる。こうした様々な方面からの影響を受けた塩谷であるが、最終的に小説史を構成していくうえで、塩谷の基準は「今日的な小説」―塩谷自身の言葉によれば「或は大宇宙の真理を明らかにし、或は古今を貫く大教訓を垂れ、或は高遠なる人生の理想を説く」[7]―であり、つまり西洋の基準で中国小説史を書くことによって、西洋の文学史と対抗できる、というものであった。つまり塩谷温の小説史の構想には、はじめから「西洋的な小説」という模範があり、それを中国小説史の中にどのように見出すか、あるいはそれがどのように形成されてきたかという観点から記述されていたように思われる。このように小説史の分野においても、やはり近代化という明治、大正期の日本の命題が深くかかわっていることが確認できた。

筆者の当日の発表の要旨は以上のようなものであるが、これに対し、コメンテーターの韓国全南大学李騰淵教授より、いくつか貴重なご意見をいただいた。とりわけ明治期の中国文学史の執筆者達はなぜ『漢書』「芸文志」の「小説家」から説き起しながら、その定義の範疇には入らない、元代以降の戯曲小説の変遷を記述するという矛盾する態度をとったのか、筆者は西洋の基準にたった塩谷温にくらべ、森槐南のほうが、豊富な読書量に基づき、中国小説史の変遷をとらえた、と評価したが、しかしながら、森槐南の『作詩法講話』とは、詩作について解説した本であり、詩を文学の中心とする儒家的な文学観に立脚しているのではないか、という二点は非常に参考になった。また趙東一ソウル大学教授による『東亜細亜文学史比較論』では、文学史と近代の問題について、韓国、中国、日本、ベトナム

で書かれた文学史を比較考察している、とのご教示を受けた。

第一の問題については、内容の矛盾する寄せ集めの小説論を展開しなければならなかった、そのこと自身が当時の小説史記述者達の知識的な未熟さを物語ることになっていると言い得ると思う。第二の点については、筆者にとって、森槐南の小説論が非常に新鮮に感じられたために、見落としてしまったことであった。筆者自身森槐南と塩谷温それぞれが描いた中国小説史の継承関係と相違については、考察しきれていないと感じており、李騰淵教授はその点を的確に指摘してくださったものと思う。塩谷温は本来大学の学部時代には中国史を専攻していたが、大学院に進学し、次いで留学するに及び中国文学に専門を変えたという経歴を持つ。[8] さらに塩谷にとっては『支那文学概論講話』は、外国留学の成果を発表するという大きな意味を持つものであった。これに対し森槐南は正規の教育を受けることはほとんどなかったが、漢詩壇の領袖的立場にあって、幅広い人脈を持つスケールの大きな人物であった。[9] 小説の読みに関しても、森槐南は深い漢学的知識と漢詩人としての自身の感覚を持って読んでおり、中国小説のおもしろさが十分に伝わってくる。これと比較すると『支那文学概論講話』では、いかに西洋の学問の型に中国文学史、小説史をはめ込もうとしているかが、鮮明に浮かび上がってくるように思われる。

しかし実際の発表においては、以上のことに関してあまりうまく説明することができなかった。帰国後再度の調査により森槐南が『作詩法講話』に先立ち、明治二四年（一八九一）から二五年（一八九二）にかけて『早稲田文学』に「支那小説の話」という連載を行っており、[10] その内容は『作詩法講話』に書かれた小説論とほぼ同じであることを確認した。こうした資料をもとに、今後さらにこのテーマに関して、考察を深めたいと思っている。また李騰淵教授もこうした文学史、小説史の問題について、関心を寄せておられるようなので、今後も継続して交流の機会をもちたいと願っている。

二―四　発表内容（三）

現代当代関係では、小川利康早稲田大学助教授の発表の他は直接聞くことができず、また筆者の専門も異なるので、詳述はできないが、論文を読んだ範囲で簡単に紹介したい。王潤華台湾元智大学教授の「辺縁思考与辺縁閲読」では、中国語圏における周縁であるシンガポールで、いかに中国語による文学作品が書かれてきたか、フランスに移住しながら創作活動を行なっている高行建にも触れながら論じていた。李旭淵西江大学教授の「流散（diaspora）与文学――以高行健為例」、趙憲章南京大学教授「〈霊山〉文体研究」も高行健に関する論文であり、二〇〇〇年にノーベル文学賞を受賞した高行健に対する関心の高さが伺われた。三論文ともに共通するのは、中国大陸から離れながら、中国語で創作を行なうことはどのような意味を持つのかという関心であり、世界の中における中国文学として、その存在は相対化されている。それは清以前においては、中国が圧倒的な中心として存在し、周縁の世界に影響を与えていたことと比較すると、非常に対照的である。

小川利康早稲田大学助教授の「論周作人〈老虎橋雑詩〉及其雑詩的体式」は、一九四五年以降漢奸とされた周作人が、「雑詩」という形式によって、自らの気持ちを表現した背景とその内容について考察を試みた論文であった。獄中の周作人が、なぜ旧詩でもなく、口語でもなく、完全な散文でもない「雑詩」を選択するにいたったのか、内容と形式のかかわりを具体的な作品に即して説明した非常に興味深い発表であった。討論の場において、どのような議論が行なわれるのか期待したが、周作人の戦争責任と日本の関係に関する質問など、発表者の小川助教授個人に対して発せられる問として、果たして妥当なものであるか疑問に感じられる質問が提起され、議論が論文の論点からはずれてしまったようで、少し残念に感じた。この点について後日小川助教授にお話を伺ったところ、質問者は普段から親交のある研究者であり、そうした信頼関係のもとに、踏み込んだ質問がなされたと理解しているということであった。

東アジアという視点によって、これからの中国文学研究が様々な形で拡大する可能性が開かれる一方で、そのよう

な視点を取り入れる際に、各国間の関係に由来する微妙な問題が横たわっていることも心に留めておく必要があることが痛感された。

論文発表終了後、総合報告、総合討論の時間が設けられた。総合報告は高麗大の三人の若手研究者が、それぞれの専攻する分野の発表について内容を要約して報告した。続いて佐野誠子氏が、発表をしない自分にも発言の機会が与えられたことに感謝すると述べた後、学会に参加した感想を二点述べた。一つは「長恨歌」の受容が日韓両国で大きく異なっていたという発表を例に挙げ、各国の文化の深層を理解するためには、比較文学の視点が有用であること、第二点は大山氏が発表した『詩法源流』の版本問題のように、今後中国文学の研究者は韓国・日本両国に保存されている書籍に注意を払わなければならないということである。最後に佐野氏は専攻する魏晋南北朝志怪に関連して、一つの問いを提起した。それは『中国古典文学と朝鮮』(韋旭昇著、柴田清継、野崎充彦訳、研文出版、一九九五年)によれば、韓国文学は『太平広記』の影響を強く受けたものの、そのうちの志怪的な話は好まれず、才子佳人式の恋愛小説ばかりが流行したというが、韓国の古典には、本当に鬼・狐・妖怪といった志怪的な話は見られないのだろうかというものである。それに対し、詳細は不明だが、韓国にもその種の話があるとの反応があった。　最後に王水照、胡文彬両氏が二日間の発表を振り返って総評し、会議は終了した。以上が本学会についての報告である。

三、最後に

韓国は一九九二年の中国との国交回復以来、多くの留学生を中国に送りこんでいる。筆者が一九九六年から九七年にかけて北京大学に留学した時にも、韓国人留学生の数は、日本人とほぼ同じあるいはより多いと感じられた。また中国文学を学ぶ韓国人留学生の特徴として、中国で学位を取る者が多く、その結果少なくとも三年から五年は中国において留学生活を送ることとなり、帰国後も指導教官と綿密な連絡を取っているようである。また大陸に留学のかな

わなかった世代の研究者の多くは、台湾に留学経験を持ち、大陸との国交回復後は、積極的に大陸の研究者との交流を深めているという。今回の学会に、中国から多くの著名な研究者が参加したのも、崔溶澈教授をはじめとする高麗大学のスタッフの人脈によるものといえるだろう。またこうしたことから、中国人研究者の間でも韓国の存在が大きく意識されるようになっていると思われる。韓国における中国古典詩歌研究の歴史を紹介した柳晟俊韓国外語大学教授の「韓国における中国古典詩歌研究の回顧と展望」[11]によれば、韓国では、一九七〇年代、それ以前からあったソウル大学、韓国外語大学、成均館大学などの他、高麗大学、壇国大学などで相次いで中国文学科が開設され、現在では百余りの大学に中国文学に関係する学科が設けられ、これに従事する教授の数は約五百名に達し、数十の学科で修士、博士課程を開設しているという。続けて柳教授の言葉を借りれば、現在「韓国で中国文学を研究するというのは必要であると同時に将来性のある分野と認識され」ており、それは「二十余年前においてはほとんど考えることもできなかったくらいである」という。高麗大学中国文学科の現スタッフも崔教授をはじめとして、宣釘奎教授、白永吉教授といった方々は、高麗大学中国文学科の第一期卒業生であり、まさに韓国における中国文学研究を切り開いてきた世代にあたる。このように現在韓国における中国文学研究は、こうした開拓期の研究者が、新しい世代の教育を行っており、草創期のエネルギーを継承しつつ、環境を整えていく時期を迎えているものと思われる。

一方中国においても改革開放以後の政策の中で、世界各国からの留学生を受け入れる一方、研究方法に関しても、一時の過度な社会主義的解釈を改め、積極的に西洋の文学論などを取り入れる傾向にあり、欧米の研究者との交流も活発になっている。このように中国文学研究を取り巻く環境は、大きな変化を迎えようとしている。それでは日本の中国文学研究あるいは中国研究はそうした環境の変化の中で、どのような位置を占めることになるのだろうか。「日本中国学会便り」二〇〇二年度第二号に掲載された興膳宏氏の「日本シノロジーの位置」や、『中国―社会と文化』第一七号の特集「二十一世紀の日本に東アジア文化研究は必要か？」に掲載された論文の多くが、このような研究

環境の変化に、日本の中国研究が対応していない、あるいは取り残されつつあることへの危機感を述べている。例えば興膳氏は、フランスの中国学の若い世代には、日本語のできる人が少なくなったと述べ、その原因について、上に指摘したような状況の変化に触れるとともに、「日本の中国研究は、単にフランスといわず、かつてのように世界に向けて発信し、世界中の中国学者を惹きつける魅力を失ったのか」、我々はこのことを自問する必要があるのではないか、と指摘されている。あるいは『中国―社会と文化―』の上記の特集に対して寄せられた理事・評議員の意見の中で、執筆当時米国ハーバード大学で長期研修中であった小島毅氏は「世界から必要とされているのか？」と題し、アメリカにおいて興膳氏と同じような危惧を感じたことを率直に記している。しかし小島氏はアメリカの中国研究の場に身をおいて、「日本の研究は提示のしかたがへたなのである」と感じるようになったと述べている。さらに「高度な読解技術を持つ日本の研究が、国際的に無視もしくは軽視され」ているその大きな原因は、必ずしも日本の研究がだめになってしまったのではなく、研究の目的を明らかにしないことなど「論文の書き方にあるのではないか」と指摘している。しかし興膳氏や小島氏の見解もふくめ、全体に日本をとりまく研究環境の変化に対し、とまどいを吐露するものが多く、変化に気づいたものの、未だ具体的な対策を見つけるには至っていないという実状を反映しているものと思われた。

今回筆者もこの学会に参加して、論文発表、大会運営の両面にわたり、韓国側のプレゼンテーション能力の高さに感心した。そして中国を中心に新たに編成されつつある研究環境の中で、韓国が着実に重要な位置を占めつつあり、日本はそれに遅れをとりつつあるのではないかと感じ、我々は真摯に韓国の優れた点を学んでいく必要があると痛感した。また報告記を書く過程において、筆者は韓国における中国文学研究の歴史を知ることによって、同じ中国を対象としながらも、「東アジア」という概念の認識をはじめとして、いくつかの問題意識の違いに気づかされることになった。これまで様々な理由で世界の中国研究者は、中国と直接交流することが難しく、そのような時に中国に近く、

かつ高い水準の学問を維持していた日本を通して中国を理解することは、重要な意味をもっていたものと思われる。このように日本での研究成果がほぼ世界の最先端の研究成果であった時代には、日本の研究者は、他の国々の研究者との問題意識のずれを意識する必要がなく、また自分達の問題意識の個別性にも気づきにくかったのではないだろうか。しかし様々な方法での交流が可能となっている現在、それぞれの問題意識の個別性、限定性が意識されるようになっており、その傾向は今後益々顕著になっていくだろう。そして個々の研究者が抱く問題意識とは、多かれ少なかれ、研究者の属する国や社会からの影響を受けざるを得ない側面を持っている。しかし重要なのは、そうした問題意識の相違にとらわれることではなく、個別の問題意識に端を発しながらも、厳密な手続きを経ることによって得られる研究成果は、国や立場を超えて世界の共通の成果として受け入れられるということであり、そうした認識を研究者が共有することだろう。我々は有用な研究成果を生み出す努力をすると共に、自己の個別の問題意識を分析し、説明できる言葉を持ち、立場の異なる研究者とそれぞれの問題意識の相違を理解し合い、それを前提とした上で、それぞれの学問的成果を有効に議論できる場を作り出すよう努めていく必要があるのではないだろうか。そしてそのような場を通じて、日本の中国研究の意義も世界に再認識されるのではないだろうか。

最後にこのような有意義な学会参加の機会を与えてくださった中国語文研究会、高麗大学中国文学科の皆さんに感謝の意を表したい。

注

（1）中国語文研究会の歴史については、学会当日配られた冊子『中国文学与東亜文化』冒頭掲載、崔溶澈教授による「致詞」及び学会パンフレットに添付された「学会簡歴」を参照した。

（2）この訪問の経緯等については、「成任編刊『太平広記詳節』について」「附記」（『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第五号、二〇〇二年所収）を参照。

（3）韓国におけるアジア論の不在については、ほかに宮嶋博史「朝鮮におけるアジア認識の不在」（石井米雄編『アジアのアイデンティティー』山川出版社、二〇〇〇年所収）にも指摘がある。

（4）筆者の『広異記』あるいは中国小説史の考えについては、拙論「伝奇勃興以前の唐代小説における虚構について―「淮南猟者」（『紀聞』）と「安南猟者」（『広異記』）の比較分析を中心として―」（『日本中国学会報』第五二集、二〇〇〇年所収）及び「志怪と伝奇―小南一郎先生の研究をめぐって―」（『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第四号、二〇〇一年所収）参照。

（5）『支那小説戯曲小史』は、第一篇「支那に於ける小説戯曲の発展」、第二篇「元朝」、第三篇「明朝」、第四篇「清朝」からなる。

（6）和田英信「明治期刊行の中国文学史」（川合康三編『中国の文学史観』汲古書院、二〇〇二年所収）

（7）『支那文学概論講話』（大日本雄弁会、一九一一年）

（8）塩谷温については塩谷自身の回顧録『天馬行空』（日本加除出版、一九五六年）、藤井省三「塩谷温」（江上波夫編『東洋学の系譜・第二集』大修館書店、一九九四年所収）及び前川晶「塩谷温と『支那文学概論講話』について」（『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第四号、二〇〇一年所収）を参考にした。

（9）森槐南については神田喜一郎「日本における中国文学」上下（『神田喜一郎全集』第六巻、第七巻同朋舎、一九八五年所収）及び入谷仙介『近代文学としての明治漢詩』（研文出版、研文選書四二、一九八九年）を参考にした。

（10）『早稲田文学』五、一〇、一二、一四、一八、二〇に掲載。飯田吉郎「明治期における中国戯曲・小説の研究文献目録」（『清末文学言語研究会会報』第二号所収）参照。また筆者は今回とくに唐代小説について注目したが、森槐南が明治期いち早く『紅楼夢』について言及した日本人であったことは、つとに伊藤漱平「日本における『紅楼夢』の流行―幕末から現代までの書誌的素描」（古田敬一編『中国文学の比較文学的研究』汲古書院、一九八六年所収）において指摘されている。この論文については、大木康氏よりご教示いただいた。

（11）『中国―社会と文化』（第一五号、二〇〇〇年所収。）